在日外国人子育て家族の住まい

孫詩彧（国際日本文化研究センター）

目的

本研究は、日本で暮らす外国人家族の子育て生活を、その住まいの実態を通して解明するものである。具体的に、「外国人」という身分のもと、エスニシティ・ジェンダー・貧困などのファクターが複合的に作用しているなか、住まい(住居、立地、環境など)がいかなる課題を抱え、子どもがどのような影響を受けているか、を明らかにする。

研究背景

住まいは生活の基盤として日本の育児や福祉研究において重視され、「子育てに配慮した住宅と居住環境に関するガイドライン」なども策定されている。そこで居住福祉の観点から日本の住まいは次の課題を抱えていると指摘されている。1.空き家が増えるものの居住に困る人がいること、2.高価な住宅で住まい確保のコストが高いこと、3.子育て期や高齢期など、入居者の需要に合わない住宅問題（岡本 2022)。

一方、日本では少子高齢化が進む中、外国人労働力を多く受け入れるようになった。ところが外国人の場合、住居確保が入国審査・住民登録の前提であるため、住まいの問題は顕在化になりにくく、実際に家賃負担などによる家族生活へのしわ寄せが暗黙に進行している。また、家族とともに日本に移住し、日本で長期的に住み続ける外国人の割合も増えた。子育て文化や生活習慣の違いがあるなか、外国人子育て家族の居住ニーズと課題を把握することは重要である。

方法

本研究が用いるデータは、2023 年 6 月から 2024 年 6 月頃(予定)にかけて、日本各地(北海道、東北、首都圏、関西、中部、九州など)で暮らす中国人子育て家族に対して行った調査から得たものである。調査は現住所での参与観察と大人への半構造化インタビューで構成される。調査の手続きに関して北海道大学の倫理審査委員会で承認を得て、倫理規定に遵守する。

結果と議論

まず、在日外国人子育て家族が抱える住まいに関する課題を、データをコーディングして分析した結果、次のことが抽出された。1.外国人かつ子連れの家族が入居できる物件自体が少ない。選択肢がかなり限られるなか、ほとんどの家族は相場以上の家賃を支払うか、狭小住宅で我慢するか、中古住宅の購入を余儀なくされている。2.入居後も、騒音や子どもの遊び方などでトラブルが多発し、外国人であることによる言語・文化などの要因も兼ねて生活環境に関してストレスを感じやすい。3.子どもの入園・入学、ならびに外国人家族自体の生活基盤が不安定のなか、住まいを安定して確保することが難しい。

以上の結果を踏まえ、外国人子育て家族のエスニシティや貧困などがいかに複合的に作用するかの観点から、議論と考察を行う予定である。

参考文献

岡本祥浩 2022『居住福祉を学ぶ』東信堂

キーワード：在日外国人、子育て家族、住まい